

安部公房『密会』論

——盗聴システムの権力性——

一、『密会』のアクチュアリティ

安部公房の『密会』（新潮社書き下ろし、一九七七年二月）は、ある夏の朝、突然現れた救急車に妻をさらわれた男が、彼女を連れ戻すために巨大な病院内部を搜索する長篇小説である。本作の特徴は何よりもまず、舞台となる病院に張り巡らされた盗聴システムの存在だろう。病院内には「二百数十か所におよぶ常設盗聴器と中継機」が張り巡らされ、警備室の「集中監視システム」によって管理されている。この盗聴行為が開始されたのは五年前であり、「人間関係神経症」の末にインポテンツとなった病院の副院長が、その治療のために、患者同士、あるいは患者と外からの見舞客の性交に興味を持ったのが始まりである。副院長は警備主任と協力して盗聴システムを作り上げるが、当初はインポテンツの治療のために作られた筈のそれは、彼らが病院内を監視し支配するための道具として、次第に利用されるようになる。また、彼らは患者と見舞客の密会（通

片 野 智 子

称「連れ出し」を手引きする斡旋業者と提携し、「連れ出しの必需品である貸衣装」全てに盗聴器を取り付けることで、病院内外の音声をくまなく傍受している。副院長は男の妻もまたこうした密会に関与しているのではないかと疑っており、男は妻への嫌疑を晴らし、その行方を探るために、盗聴システムを利用して病院内を探っていくことになるのだ。

ところが、こうした大がかりな仕掛けにも関わらず、『密会』はこれまで安部公房の作品の中でも失敗作として扱われることが多かった。その最たる論が岡庭昇の「戦後文学の敗退」であり、岡庭は『密会』を「図式のうえに饒舌をつみかさねた」「不毛な作品」と断じた上で、「アヴァンギャルドとは、ひとくちに言えば現実をこえたところに現実を見出す方法である」が、『密会』の「非現実」とはたんに現実性の欠落にすぎない」として、戦後前衛文学の旗手としての安部の行き詰まりを指摘している。^{注1} こうした発表当時の『密会』の否定的評価について総括している斎藤朋督によれば、これには「現代社会の問題を、

斬新なアレゴリーをもって読者の眼前に顕現させる」「寓話作家（安部公房）」という同時代の読みの枠組みがあったことが影響しているのではないかとことだ。実際に、安部の前衛作家としての地位を確固たるものとした『砂の女』（一九六二年）においても、「砂のイメージに、現代の日常的現実の状況をだぶらせ、それとたたかう男のうちに、今日的生のありようを見る、そういう評価は、『砂の女』についての常識となった」という高野斗志美の指摘が代表しているように、そうした読みのモードは既に定着していた。^{注3}ところが『密会』では、下半身を馬のような四つ足に改造した副院長や、誘拐された妻と思われる女性が参加するオルガスム・コンクールなど、その筋立ての突飛のなさや構成の複雑さが目立ったことで、読者の酷評を浴びることになったというのが、斎藤の見解なのである。しかも、そうした読みの枠組みは近年まで引き継がれており、「性と医学という最も現代的な問題を小説化しようと試みた」のだという山田有策の論や、^{注4}『密会』の「〈病院〉が暗喩或いは寓意するものとは、人々を一樣に侵している、そしてその姿を容易に把握することの為し得ぬ、社会構造の在り方」であるとする小長谷卓史の論などがある。^{注5}そして、山田に至っては「スラップスティック性が過剰で、リアリティを著しく欠く」として、岡庭と同様にその「現実性の欠落」こそが『密会』の欠点であると指摘しているのだ。

このように『密会』は、現実を寓意的に描き切れなかった作品と見なされることが多いが、それでは描き切れなかった現実

性とは何かとなると、従来の論文ではそれが十分に示されているとは言い難い。そこで『密会』と関連する一九七〇年代の性言説を検討してみると、まず赤川学が、既に六〇年代から戦前のような純潔尊重を強調する言説には翳りが見え始めており、七〇年代には婚前性交を容認する言説が完全に優勢となったと指摘している点が注目される。赤川はこうした婚前性交容認規範が広がる要因として、「当人同士が愛しあっているなら、第三者が口を挟むべきではない」とする親密性パラダイム^{注6}があったことを指摘した上で、「あらゆる性行動の領域において、その可否を判断する基準として『愛』や『親密性』が大きな位置を占める」ようになったことが、七〇年代の性をめぐる言説の最大の特徴であると述べている。だが赤川自身も指摘するように、それは「恋愛とセックスと結婚の三位一体」という近代家族の理念、いわゆるロマンチック・ラブ・イデオロギーを皮肉にも強化することになった。^{注6}すなわち、「愛さえあればセックスしても構わない」という婚前性交容認規範は、「愛がなければセックスしてはならない」という論理に、更には「真に愛しあったもの同士がセックスし結婚することこそが幸福である」という論理へと結びついていったのだ。このように、一九七〇年代に広まった婚前性交容認規範は、表向きは性の解放を推し進めたかに見えて、一方では近代家族の理想を強調することに荷担してもいたのである。

そこでこうした見解をもとに『密会』に目を転じてみると、盗聴システムによって記録された人々の性行為がテープとして

売り出され、その売り上げによって病院内の体制が維持されているという設定は、一見すると荒廃した性の世界を描いているように見えるだろう。つまり、そのような病院内世界は、婚前性交容認規範が拡大した一九七〇年代の風潮を極端な形で戯画化したものと見なせるかもしれないのだ。ところが、盗聴システムを作りだした副院長がインポテンツになったそもその原因は、副院長とその妻が「素朴な愛の確信」を得るために「すべての会話を嘘発見器で確認」した結果、副院長が「人間関係神経症」に罹ってしまったためというものである。すなわちそこで描かれているのは、単なる性の荒廃や自由化の戯画化ではなく、愛に基づく性交といったロマンチック・ラブ・イデオロギーを、過剰に内面化した結果陥った病に他ならないのである。

それに加えて、『密会』において描かれる盗聴システムの姿は、一九七二年に起きたウォーターゲート事件を彷彿とさせるところがある。ウォーターゲート事件とは、ワシントンのウォーターゲート・ビル内にある民主党本部に盗聴器を仕掛けようとした五人の男が逮捕されたというものであり、捜査の結果、犯行には当時のリチャード・ニクソン大統領と、彼を支える共産党の大統領再選委員会が関わっていることが明らかになった。この事件は日本でも大々的に取り上げられ、例えば読売新聞では「高度情報化社会のわが国にとってウォーターゲート事件は『対岸の火事』ではあり得ない」とする記事や、一九七〇年に日本共産党の宮本顕治幹部委員長の自宅の電話に盗聴器が仕掛けられていた事件を取り上げ、公安や警察による国民

の盗聴を規制すべきとする記事などが次々と書かれている。^{注8}

『密会』はまさにこうした時代の流れの中で書かれた作品であり、安部自身が後にインタビューでも語っているように、盗聴によって「壁のない家で暮らしているような状態」^{注9}に置かれた人間がどうなるか、という一つの実験小説になっているのである。

こうしてみれば明らかのように、『密会』は必ずしも現実性が欠落した作品であるとは言えないことになる。むしろ『密会』は、性の自由化の裏で強化される近代家族の理念と、盗聴を利用した監視という、極めてアクチュアルな問題を取り扱っているのだ。しかもこうした監視と性の問題には、いずれも権力の問題が密接に関係してくる。そこで本稿では、盗聴システムが持つ権力性に注目して、『密会』を読み解いていきたい。まず、『密会』に登場する盗聴システムが、同時代において問題視されていた国家権力による監視を象徴するものでありながら、その範疇に収まらない、規律訓練型権力の問題にも関係していることを明らかにする。その上で、都合四種類の「ばく」の手記で構成されている『密会』において、盗聴システムと関わることで「ばく」の手記の書法がどのように変化していくのかを、四種の手記のうちの主にノートⅠとノートⅡの記述に限定して分析し、見ることをめぐる「ばく」の様々な欲望のかたちを明らかにしたい。

二、盗聴システムと権力

まずはじめに、『密会』における盗聴システムとそれを利用する者達の姿が、国家権力による監視の問題に通じていることに着目したい。先にも触れた通り、『密会』の盗聴システムは病院内のほぼ全域を支配しており、人々にはそれぞれコード・ナンバーが割り当てられ、その符牒ごとに盗聴器で追跡した記録がカセット・テープに収録され、警備室に保管されている。そのような「集中監視システム」に対して、患者たちはみな恐怖の念を抱いている。例えば、主人公の男と副院長の女秘書が連れ立って食堂を訪れる場面では、盗聴マイクに音声を拾われまいと「不自然に肩を寄せ合い、耳打ちをしてい」た患者たちが、女秘書がやって来ると動揺し、「さりげなく席を立つてしまふ」姿が描かれている。彼らがそうして女秘書を忌避するのは、その直後の場面で「坊主頭にトレパンの二人組」が白衣の青年に激しい暴力を振るっている場面から明らかになる。「トレパンの制服、そろいのイガグリ頭、空手の訓練、統制のとれた行動」をした二人組は、盗聴器の電池交換を担当する警備員であり、副院長や警備主任の手足となって病院内を巡回している。この時、女秘書は手慣れた様子で彼等の暴力を制止するが、傍にいた患者たちの中に「誰一人として仲裁に入ろうとする者はいない」といし、「誰もが不機嫌なふくれっ面」で女秘書と二人組を見つめている。ここから、病院内では警備員による患者たちへの暴力が横行しており、彼らを操る病院上層部の者

達への憎悪と恐怖が患者達を根強く支配していることが窺えるだろう。ただし、男が警備員たちの行動を観察し「彼等の行動規律はすべてリーダー格の青年」によるものではないかと見なしているように、警備員たちはある程度の自治権を持っている。そこで、女秘書は自らの肉体を利用して彼らに警備主任を殺害させ、その代わりとして妻をさらわれた男を推薦する。困惑する男に副院長は、女秘書は「いったん手に入れようと思っただけで、手に入れるまでは諦めない」女であり、男は彼女に気に入られてしまったのだと忠告する。一方で、副院長は警備員に命じて男を尾行させ、最後には彼らを使って男を病院内に監禁してしまふ。そこからは、警備員の力を利用することで、副院長と女秘書が互いに病院の実権を奪い合おうとしている姿が窺える。そうした権力争いに男が巻き込まれていく様相が、『密会』では一つのドラマとして描かれているのだ。

こうした盗聴行為と暴力行為を利用した権力者による監視と支配は、まさに『密会』発表時に活動していたKGB（ソビエト連邦）やシュタージ（東ドイツ）といった秘密警察と、そうした組織を擁する共産主義国家の管理体制に通じるところがある。そのような全体主義の恐怖を描いたのがジョージ・オーウェルの『一九八四年』であるが、本作の舞台となる架空の全体主義国家「オセアニア」には『密会』の盗聴システムとよく似た「テレスクリーン」という装置が登場する。「テレスクリーン」は国中の至る所に設置されており、「声を殺して囁くくらいは可能」だが「それ以上の音を立てると、どんな音でもテレ

スクリーンが拾ってしまう」上に、「金属板の視界内に留まっている限り、音だけでなく、こちらの行動も捕捉されてしまう」というものである。それ故に、国民は「自分の立てる物音はすべて盗聴され、暗闇のなかにいるのでもない限り、一挙手一投足にいたるまで精査されていると想定して暮らさなければならぬ」いのだ。その上、テレスクリーンを通して国民の言動を常に監視している「思考警察」は、少しでも反逆の疑いのある者を徹底的に拷問し殺害、最後にはその存在すら消してしま^{注10}う。

このように、権力者による盗聴を利用した監視と暴力に基づく支配を描いている点で、『密会』と『一九八四年』は似通った面を持っているのである。そして、先に取り上げたウォーターゲート事件は、盗聴を利用した権力者による監視の問題が共產主義のみならず、官僚的に組織されたあらゆる国民国家が内包するものであることを示している。だとするならば、『密会』は日本がそうした警察国家へと傾倒する危険性に警鐘を鳴らすために描かれたものなのだろうか。

そこで注目したいのが、『密会』の盗聴システムの自律性である。ここでいう自律性とは、盗聴システムが人の手を必要としない自動的なものであるうえに、それが権力者の意志を越えて作動する制御不可能なものであることを意味している。例えば、副院長と警備主任は病院内の人々の性交を盗聴した記録を「密会テープ」として売り出しており、愛好者には「月々二千円の会費で毎月一本の新作テープを借り出せる仕組」を作り上げているが、この資金源によってマイクロ・コンピューターが

導入されたことで、盗聴と録音は自動的に行われるようになったという。それを描いたのが次の場面である。

一トラック（全面一方向）、六チャンネルという特殊な録音形式なので、左右のヘッドホンからそれぞれ三系統ずつ、合わせて六つの無関係な音が同時に聞えてくる。その六つの音に、同時に神経を働かせなければならぬわけだ。かなりの時間、持続する音もあれば、二、三秒で消えてしまう音もあった。消えては現れ、消えては現れる、執念深い場面もあれば、一瞬ちらついただけで二度と姿を見せない音色もあった。その選択は、マイクロ・コンピューターが行っているらしい。まず音質なり音量なりの急激な変化に反応して、中継器が作動しはじめ、ついで人声の場合は、声帯緊張係数が三・二以下のとき、それ以外の自然音の場合には、リズムやピッチが一定の法則で反復したとき、三秒以内に録音が自動停止する仕掛だ。（中略）だから、限られた容量のチャンネルで、それをはるかに上回る音源を処理することが可能になるわけだ。この一年で、中継機は総数二百四十台に達し、一台の受持ち範囲が半径約百メートル、容量八チャンネルなので、計千七百十二の回路同時作動の能力をもち、病院全域をほぼ漏れなく監視下においているという説明だった。

この引用からも解るように、盗聴器が拾った無数の音のいず

れを録音するのは、人間ではなくマイクロ・コンピュータが選別している。その中には「密会テープ」を作成するのに利用できる「女のあえぎ、しのび笑い」などの性的な音声や、「おびえている年齢不詳の息づかいと、それをはげましている男の事務的で苛立たしげな決まり文句」という密談を思わせる音声も存在しているが、「放尿、もしくは水道の蛇口からコップに水を注ぐ音」という生活音や「隙間風のような口笛」という、一見すると何の意味もなさないような音声までもが録音されている。当然それら全てを十八名の警備員と警備主任だけで聞き分けることなどできる筈もなく、大半の録音記録は誰に知られることもなく、ひたすらテープとして蓄積されていくばかりなのだ。それにも関わらず、マイクロ・コンピュータを利用した盗聴システムは、患者たちの恐怖の対象として君臨している。それについて男は「手に負えないほど巨大化し、さらに休みなく情報を吸収しつづけている盗聴システムは、事実操作している者など誰もいないのに、存在しているというだけで畏怖され、服従心を起させるようである」と語っている。ここから解るように、機械によって自動制御された盗聴器が病院全体に張り巡らされていることで、いつ何処で自分の行動を監視されているのか解らないというその不安から、人々は自ら進んで服従しているのである。すなわち、盗聴システムの権力性は特定の個人にあるのではなく、機械によって自律的に稼働するシステムそれ自体を本源としているのだ。

このことがより明確に解るのは、警備主任が殺害された場面

においてである。女秘書の指令で警備主任が殺害され、その後見として選ばれた男は「信じられないかもしれないが、ぼくは今、病院内の権力を手中におさめるほんの一步手前のところまで来ているような気がする」と言い、「前の主任もはつきりとは意識していなかったらしいが、べつに特別なことをしなくても、権力は権力」であり、「誰もがぼくの顔色をうかがい、ぼくはただそっぽを向いて顔色を隠すようにしているだけでいい」のだと述べている。確かに、この場面での男は権力を行使する力を手にしてはいるが、そこで重要になるのはあくまでも「警備主任」という肩書きであることに注意したい。そもそも、病院に訪れたばかりの男を「警備主任」に任命するということが、本質的にその役目が誰でも構わないということを示しているのである。男に権力を付与しているのはあくまでも盗聴システムであり、それは人の手を何ら必要としない。何故なら、患者たちの服従心の根源にあるのはいつどこで盗み聞きされているのか解らないという不安であり、それを可能にしているのは、膨大な音声を選別し録音しているマイクロ・コンピュータだからである。また、副院長が「病院全体のことなんか、誰に分るものか」と言っていることから解るように、病院全土を監視している盗聴システムは、それを開発した当の副院長本人にも扱いきれないものなのだ。^{注11}

このような盗聴システムの姿は、ミシェル・フーコーが提唱する規律訓練型権力の範型としてのパノプティコンに通じているといえるだろう。規律訓練型の権力とは、個人の身体への持

統的な監視を媒介にして、個人を権力に自ら服従する主体へと作り替える権力のことである。そしてフーコーがこの範型として挙げたパノプティコンは、一八世紀にジュレミ・ベンサムが発明した監獄のことを指し、中央に監視塔を置き、その周囲に独房を円形に配置したものである。監視塔から差し込む光によって、独房の中の囚人は監視塔の中からもよく見えるが、囚人側からは監視塔の中は暗くて見ることができない。フーコーはパノプティコンの最大の効果は、「権力を自動的なもの」にすることだと述べているが、権力を自動的にするということとは、現実に監視者がいてもいなくても構わないということである。

というのは、パノプティコンの構造上、監視塔の中央に人がいるかいないかが囚人側には決して解らないため、囚人たちは自分が監視されている可能性に常に怯えなければならなくなるからだ。その結果、囚人達はその不可視の視線を内面化し、あらかじめ与えられている規則に従っているかどうかについて、自分で自分を監視しはじめるようになるのである。^{注12}

こうしたパノプティコンという装置のうち、人がいるかどうかはわからない監視塔が及ぼす自動的な監視の効果は、副院長や男が利用しなくても、それ自体が自律的に作動する『密会』の盗聴システムと通じている。しかも、こうしたパノプティコンが『一九八四年』における「テレスクリーン」のような装置と異なるのは、その権力が上からの一方的かつ暴力的なものではなく、不可視の視線を媒介に自ら進んで権力に服従させるという、主体化の機制によって成り立っていることだが、これは

『密会』の「存在しているというだけで畏怖され、服従心を起させる」盗聴システムの仕組みに通じている。勿論、警備主任となった男は盗聴システムを「操作している者など誰もいない」ことに気づいているが、患者たちにそれを知る術はない。それ故に、患者たちは誰にいつどこで自分の行動を監視されているのか解らないという不安から、「見えない盗聴マイクに向って延々と自虐的告白を続ける」ような、権力に自ら服従する主体へと作り替えられてしまうのである。

しかも、そうした主体化の影響を受けているのは患者だけではない。例えば、副院長は「良き医者」は「良き患者」という哲学を掲げているが、これは、医者Ⅱ（監視する者）と患者Ⅱ（監視される者）の分裂を自己の内側に抱えこんでいることを示している。そのことは、副院長が「あいにく交接は、生殖器でするものじゃない、人間関係中枢でするものなんだ」といい、「人間関係中枢という見張り役が、納得ずくで始動スイッチを入れてくれない限り、その気にもなれないってことだな」と自らのインポテンツの原因について語っていることから解るだろう。この「人間関係中枢」が具体的に何なのかは最後まで明かされることはないが、副院長の妻が「性行開始の予告に、結婚式という名前をつけたり、交接に専念するための一時的離脱を新婚旅行と呼んだりする、社会的な嘘があるでしょう。とたんに猥褻感が消えてしまうわね。儀式化された性行為には、人間関係中枢も安心して通行証を発行しちゃうのよ」と言っていることから、「人間関係中枢という見張り役」とは、自己の内側

に存在する正しい性行為を行って、いかかかの監視役であることがわかるだろう。つまり副院長の内部には結婚や新婚旅行といった近代家族的な性の規範や慣習が内面化されており、「人間関係中枢」とはそれに基づく副院長自身の自己監視装置なのである。「人間関係中枢」が性の「始動スイッチ」を入れてくれるという発言の通り、副院長は「人間関係中枢」という監視装置に基づいて性的に興奮しているが、その監視が過度に行き過ぎたことでインポテンツに陥ってしまったのだと考えられるだろう。このように、患者たちを支配する権力者である筈の副院長でさえも、規範に従っているかどうか、自らを自らで監視しているという点で、盗聴システムが体現するようなパノプティコン的権力構造の内側に閉じ込められているのだ。

では、そのような盗聴システムの孕む権力性は、この物語の語り手である「ぼく」（妻をさらわれた男）に如何なる影響を及ぼしているのだろうか。そこで次章では、三冊のノート、とりわけ副院長への報告書として書かれたノートⅠとⅡの書かれ方の変遷に注目し、それを規律訓練型権力と深い関係にある告白の機制と絡めて分析する。それによって、見ることをめぐって変化していく「ぼく」の欲望の姿を浮き彫りにしたい。

三、見ることをめぐる欲望

まず、『密会』の語りは「ぼく」によって書かれるノートⅠ、ノートⅡ、ノートⅢ、付記という四篇の手記から構成されている。

る。ノートⅠでは妻をさらわれた「男」のプロフィールが紹介された後、「以下の報告は、右の男に関する調査の結果である」として、ノートが書かれるに至った経緯が紹介される。この男こそが妻をさらわれた「ぼく」に他ならないが、副院長（ここでは「馬」と呼ばれている）に旧陸軍射撃演習場跡に呼び出された「ぼく」は、一冊のノートと三本のカセットテープを渡される。「ぼく」はテープに消えた妻の手掛かりが隠されているのではないかと期待するが、テープに録音されていたのは「消えた妻を捜して右往左往しているこのぼく自身」であつた。「ぼく」は狼狽するものの、結局「テープに記録された断片を、ぼくだけしか知らない事実で修復し、彼というぼくが追いつめられた迷路の状況を、出来るだけ忠実に再現してみるつもりだ」として、「ぼく」自身についての報告書を作成することになる。すなわち、『密会』には書いている〈現在〉の「ぼく」と、書かれている〈過去〉の「ぼく」＝「男」という二つの時間軸が存在している。それらが各ノートの中に交互に差し挟まれながら、同時並行的に進行するという語りの構造になっているのである。

まずノートⅠでは、「妻の失踪以来、もう三日になるのだ」という冒頭の「ぼく」の言葉から解るように、病院に来てから三日目の「ぼく」が、病院に来た一日目の「ぼく」自身の足取りを、テープを再生しながら、「男」という三人称を用いて記述していく構成になっている。副院長がそのようにして「ぼく」自身についての報告書を書かせようとするのは、「ぼくのアリ

バイ」を「ぼく」の手で立証させるために他ならない。というのは、ノートⅢで明らかにすることが、ノートⅠが書かれる前の二日目の午後に警備主任が殺害され、その現場を目撃したのは「ぼく」だけであつたためだ。しかも、「殺人事件があつた翌朝」、つまり三日目の早朝に、「ぼく」は女秘書の手回しによつて、次の警備主任に任命されてしまう。ここから、副院長が「ぼく」自身の報告書を作成するよう依頼してきたのは、「ぼく」が女秘書と共謀して警備主任を殺害したのではないかと疑つてゐるためだということが解るだろう。実際に、ノートⅡの冒頭で、副院長はノートⅠを書かせたのは「ぼく」の「思想調査」のため、要するに「ぼく」の妻がさらわれたという証言は嘘で、はじめから「ぼく」は警備主任を殺害するために病院内に潜り込んできたのではないかということを探るためだったと明かしている。それ故に、ノートⅠでは「少し細部にこだわらずぎたかもしれない」と「ぼく」自身も述べている通り、妻をさらわれた「ぼく」が連れ出しの幹旋業者に依頼して病院内に潜入する様子が事細かに書かれている。更に、幹旋業者の名刺や妻が確かに病院を訪れた記録としての急患受付台帳のコピー、あるいはテープから抜き書きされた守衛の証言など、第三者の証言や証拠までもが添付されている。「ぼく」はそうした書き方をするので、自分は妻の行方を捜すために、この病院を訪れたのであつて、女秘書にはたまたま目をつけられた被害者でしかないのだということを、何とか証明しようとしてゐるのだ。

ところが、次の二冊目のノートになると、ノートの書かれ方はがらりと変わる。まず、ノートⅡを書いている「ぼく」の現在時から見ていこう。ノートⅡは四日目の「午前四時四十三分」に、副院長に電話で起こされた「ぼく」が、ノートⅠの続きを書くようにと、二冊目のノートを渡されることから始まる。ところが、これもまたノートⅢで明かされることがだが、「ぼく」は「一方的に主任に任命された翌朝」、つまり四日目の「朝の八時」に、病院に入院していた溶骨症の娘を衝動的に誘拐してしまう。この時、「ぼく」は娘と共に迷い込んだ病院内の地下道で「十二時間近く」眠つてしまい、ノートを書くことができなかった。そのため、「ぼく」がノートⅡを書き上げることができたのは、次の日、つまり五日目の晩である。そのことは、ノートⅢにおける、「ぼく」からノートⅡを受け取った際の副院長の「二た晩もかけて、やっとここまでか……」という言葉からも解るだろう。

この溶骨症の娘の誘拐という事件が起こったことで、副院長が「ぼく」にノートを書かせる目的は、「ぼく」のアリバイの証明から溶骨症の娘の搜索のためへと変化する。それは、ノートⅢで副院長が「ぼく」から手渡されたノートⅡを読み、「分つてゐるんだろう。私が何を知りたがっているかくらい」と苛立ちを示し、溶骨症の娘をさす「八号室の患者のことさ」とすぐには暴露することからも明らかだろう。「ぼく」は副院長の追求に白を切るが、「昨日も、一昨日も、ほとんど部屋にはいなかった」という副院長の指摘から窺えるように、娘を誘拐してから

ほとんどの時間を地下道の隠れ家で過ごしていたと思われる。

そうした「ぼく」の娘への執心は、ノートIの書かれ方自体にも変化を与えている。例えば、ノートIでは余すことなく自分の行動を書き記していた筈の「ぼく」は、ノートIIになると「自分に不利な証言と感じた部分は、削除する権利を保証してほしい」として、自分に「不利」な情報は「削除」していることを、読み手である副院長にはのめかしている。しかしその一方で、「もちろん洗いざらい書いてしまつつもりだ」などと書くことで、自分があたかも誤魔化しなく真実を書いているような態度をとつたりもする。このように、ノートを意図的に編集しているのか否か、それ自体をあやふやにすることで、「ぼく」は娘の居場所を探ろうとする副院長と心理的な駆け引きを行っているのだ。

こうした二冊のノートの書かれ方の変遷について、規律訓練型権力における告白の機制を参考にして、より詳しく分析したい。先にも述べたように、規律訓練型の権力とは個人を権力に自ら服従する主体へと作り替えるものだが、この主体化には、監視に加えてもう一つ、告白の規制が大きく関わっているという。すなわち、不可視の視線のもとで、個人は自らを絶えず監視し反省することを強いられるが、この反省を形象化したのが「自分自身の行為と思考の認知としての告白」であり、この告白の機制を通して、個人は「自分が何者であるのか」という意識をよりいっそう強めていく。そして、こうして獲得されたアイデンティティーこそが、自己の自律性(の幻想)を生みだし、

権力に進んで服従するよう個人を主体化するのである。^{注14} パノプティコンの見られることなく見る権力とはつまり、相手に進んで告白させることで、主体的に服従させる権力でもあるのだ。

こうした告白の機制はまさに、『密会』で副院長が「ぼく」自身についての報告書を書かせようとするものと通じている。すなわち、副院長はノートIでは「ぼく」が殺人者であるということ、ノートIIでは「ぼく」が娘をさらった犯人であるということ、書くことを通して「ぼく」自身に進んで告白させようとしているのである。

しかも、ノートIにおいて、副院長は「ぼく」が幹旋業者に依頼して病院内に潜入する様子を録音したテープを「ぼく」自身に聞かせ、それを文字にして起こさせることで、いつどこで誰に見られているのか解らないという監視の不安を、あらかじめ植えつけようとしている。実際に、「ぼく」は「あの時点で、すでに盗聴器による監視が始められていたというのは、どうも腑に落ちない」と訝しがり、急患受付台帳のコピーや守衛の証言などを持ち出すことで、自らの身の潔白を証明しようとするが、これこそ監視の視線を内面化した自己検証に他ならない。更には、「率直に言つて、釈然としないのだ。馬のやつにいっぱい食わされたような気がして仕方がない」、「いま必要なのはアリバイなんかじゃない。妻の行方に関する手懸りなのだ」というように、副院長への不信任を進んで告白することで、かえって自ら検証した自身の内面を率直に曝け出してしまっているのである。つまりそこには、不可視の視線に晒された個人が、

自らの内面をチェックし、それを告白することで、進んで権力に服従する主体へと作り替えられていく過程が現れているのだ。

しかし、ノートⅡになると、「ぼく」は副院長に対して曖昧な態度をとることで、告白の機制を無効化しようとする戦略を示し始める。こうした「ぼく」の態度が最も表れているのは、ノートⅡの後半、病院に来て一日目、溶骨症の娘と初めて出会う場面である。「ぼく」はベッドの下に盗聴器の電源を切つてから娘と会話をしたことについて、「機械が作動していてくれたら、あらぬ嫌疑をかけられる恐れもなかっただろう」と、過去の行為について後悔していることを告白する一方で、「疑われついでにそうしてもいいような気もした」、「べつに疚しいことはないと思う反面、なぜか共犯者めいた後ろめたさにせきたてられてしまう」といったように、あたかも溶骨症の娘の誘拐を最初から企てていたと仄めかすようなことを書いている。このように、娘を誘拐したのは「ぼく」ではないかという副院長の疑いを否定しつつも煽るという二律背反の態度をとることで、自身の内面の真理を語らせることで、権力に進んで服従させるという告白の機制を、無力化しようとしているのである。

更に、この「ぼく」の告白に対する抵抗は、副院長の告白を引き出すという効果をもたらす。というのは、ノートⅡで「ぼく」は二律背反の態度をとることで、副院長を焦らせ、「ぼく」にノートを書かせる真の狙いは何なのかを自ら打ち明かせせようとしているからだ。実際に、ノートⅢでは副院長が、「ぼく」にノートⅡを早く書き上げるよう催促したのは、溶骨症の娘の

行方を探るためであることを進んで告白してしまっている。このように、ノートⅠでは一方的に見られる側Ⅱ告白する側にした「ぼく」は、ノートⅡでは副院長の告白を導くことで、逆に副院長を自らの支配下に置こうとするのだ。そこには、見られる側から見る側になりたいという「ぼく」の欲望が現れているのである。

しかも、ここで重要になるのが、「ぼく」が見る欲望と共に、見せない欲望をも抱いているということだ。先にも引用した「自分に不利な証言と感じた部分は、削除する権利を保証してほしい」という言葉は、まさにその現れである。加えて、「ぼく」の副院長に対する二律背反の態度からは、自分自身について全てを明らかにせず、あえて空白部分を残しておくことで、自身の内面を見せないようにしたいという「ぼく」の欲望が伺える。

ここで、パノプティコンの監視塔に人がいるかないかは囚人側に決して知られてはならない、ということを思い出してほしい。つまり、見る欲望と同時に見せない欲望をも抱く「ぼく」は、自分の存在を極力透明なものにすることで、副院長の告白を一方的に聞くだけの存在になることを目論んでいるのである。いわば「ぼく」が夢見ているのは、不可視の監視塔に成り代わることなのだ。

こうした「ぼく」の姿は、盗聴システムに対する関わり方への変化を通しても見ることができ。例えば、「ぼく」は警備主任になったことで盗聴システムに自由にアクセスする権限を手に入れるが、ノートⅡで「ぼくは今、病院中の権力を手中に

おさめるほんの一步手前のところまで来ているような気がする」と述べているように、妻の行方を探るといふ本来の目的のためではなく、病院内の人々を支配するために盗聴システムを利用しようとしはじめるのである。また、「ぼく」が聴いている「見えない盗聴マイク」に向かって「自虐的告白」を行う患者たちの姿に、「その気になりさえすれば、病院中を足元に這いつくばらせることができそうだ」とも「ぼく」は感じていた。つまりここでの「ぼく」は、見られることなく一方的に見る盗聴すること、他者の告白を引き出し、そうすることで相手を支配する権力への欲望を抱いているのだ。このように、ノートⅠでは見られていることへの不安からかえって権力に服従してしまっていた「ぼく」は、ノートⅡでは見る欲望と見せない欲望を抱くことで、パノプティコンの監視塔のような不可視の存在として、一方的に他者を支配することを目指しはじめる。ただし、それは結局のところ、パノプティコンが象徴しているような、見る／見られるという権力構造の下から上へと移動しただけにすぎず、その構造自体から抜け出したわけではないのである。

だが、ノートⅢに入ると、「ぼく」はまた新たな欲望に目覚める。というのは、ノートⅢの冒頭で「この三冊目になって、ノートの意味も目的も、すっかり変わってしまった。これまでの二冊は馬の注文だが、今度のは依頼主がいらない」とあるように、「ぼく」はノートの読み手を失ってしまうからだ。それにも関わらず、「ぼく」は「今度こそ真相をぶちまけてしま

う」とノートを書くことを止めない。つまり、ここでの「ぼく」は見る欲望でも見せない欲望でもなく、誰でもいいから誰かに見られたい、ノートを読んでもらいたいという欲望によって行動しているのだ。こうした「ぼく」の姿は、規律訓練型権力の構造からは明らかに逸脱している。なぜなら、パノプティコンが効力を持つには、不可視の視線に見られることへの不安から、人が自らを監視し、その結果を告白する必要があるためである。ところが、「密会」の「ぼく」は、いまや不可視の視線も、自己監視も前提にすることなく、単に誰かに見られたいという欲望から進んで告白をはじめなのだ。

そのような「ぼく」の姿は、上野千鶴子が指摘した、他人の眼差しを恐れる人々から他人の眼差しを求める人々へという変化と対応している。上野は、ポストモダンと呼ばれる七〇年代後半以降の社会では、人々は「見られる安心」を求めるようになり、「見られていないとかえって不安」な状態にまで陥ったと述べている。それは、「他者の視線でプライバシーをのぞかれなくては、もう自分がだれかを確かめることもできなくなっ^{注15}た」からだ^{注16}と上野は言う。そこにいるのは、見られていることへの不安から自分が規則に従っているかどうか自己監視する主体などではなく、見られることで自分自身を他者に定めてもらおうとする客体化された個人なのだ。つまり自分で自分をろくに監視もせず、自分の姿を他者の前に投げ出して、むしろのその他者から自分を定めてもらおうという姿勢なのである。ただし、そこで注意すべきは、自己監視が完全に効力を失ったわ

けではなく、人々が従うものが社会的な規則や規範から、自身自身の趣味や好みへと変化していることだろう。つまり、与えられた規則に従っているかどうかではなく、気まぐれに浮かんできた自分の好みに合うかどうかに従って、人々は行動するようになるのであり、だからこそ自己監視はごく緩いものになるのだ。しかも、そのような趣味や好みは、きわめて移ろいやすいものでもある。上野は、そうした流動的な自らの好みに合わせて、次々と新しいものを欲する個人には、一貫したアイデンティティなど存在しないと述べている。それは、『密会』の「ぼく」の記述がノートⅢに入ると、見られたい欲望を噴出させるだけではなく、時間軸の整合性をほとんど失い、限りなく断片化していくことと対応すると言えるかもしれない。つまり、こうした上野の理論を踏まえると、『密会』は規律訓練型権力とその影響下にある人々を描きながらも、ポストモダン以降に現れた、そのような権力だけでは捉えきれない新たな人々の姿を映し出している可能性が浮かび上がってくるのである。^{注17}

ここまで見てきたように、『密会』は規律訓練型権力における不可視の視線を思わせる盗聴システムによって、見られる不安を植えつけられながらも、副院長とのノート上での駆け引きと、盗聴システムを通して聞こえてくる患者たちの告白を通して、見る欲望と見せない欲望に目覚めていく「ぼく」の姿を描いている。ところが、ノートⅢ以降になると、「ぼく」の内部では見られたい欲望が増大しはじめる。ただし、ノートⅢ以降では記述の空白がますます増えることから、「ぼく」の内側で

は見せない欲望は未だ存在していることが解る。だが、そこでの見せない欲望は、自らを透明化することでパノプティコンの監視塔のような存在になりたいという欲望とは異なり、見られたい欲望とのせめぎあいにおいて現れるのだ。このことについては更に複雑な経緯を分析する必要があるため、別稿を用意したいと思うが、『密会』は性と監視をめぐる近代的な規律訓練型権力と対応する要素を多く含んでいる一方で、それを逸脱する方向性を秘めた作品であることもまた確かなのだ。それは単にポストモダンに対応する権力を現実性として取り込んでいるだけではなく、モダンとポストモダンの双方の権力に批判的な視座を示すことになるだろうが、その経緯についても別稿で詳しく検討することにした。

注

- 1 岡庭昇「戦後文学の敗退」(『文芸展望』一九七八年一月)
- 2 斎藤朋誉「安部公房『密会』論—時空の変形とアンチ・アレゴリー」(『国学院大学大学院紀要—文学研究科』二〇一五年三月)
- 3 高野斗志美「脱出と超克—『砂の女』論」(『新日本文学』一九六二年九月)
- 4 山田有策「ぼく一人だけの『密会』」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九七年八月)
- 5 小長谷卓史「安部公房『密会』論」(『法政大学大学院日本文学論叢』(二〇一一年三月))

- 6 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』（勁草書房、一九九九年四月）
- 7 「権力へたゆまぬ挑戦―アメリカの悲劇に学ぶ」（『読売新聞』夕刊、一九七四年八月九日）
- 8 「プライバシー守れるか―日本でも市販の電話盗聴器」（『読売新聞』朝刊、一九七三年四月二四日）
- 9 安部公房「都市への回路」（『海』一九七八年四月）
- 10 ジョージ・オーウェル『一九八四年』（高橋和久訳、早川書房、二〇〇九年七月）
- 11 また、副院長は院長の存在について男に聞かれると、「院長だなんて……もう何年も、そんな質問はされたこともないし、したこともない」とも述べている。このように、『密会』では本来権力の中心である筈の院長の姿は一切見えないままなのだ。
- 12 パノプティコンについては、ミシェル・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』（田村俶訳、新潮社、一九七七年九月）を参照のこと。
- 13 フーコーは『知への意志』（渡辺守章訳、新潮社、一九八六年九月）において、規律訓練型権力にとって性的欲望とは個人を主体化し従属化するための重大な要素であり、その管理は家族という装置を通して行われることを指摘している。すなわち、家族とは本来多様な形の性的欲望を持つ個人を異性愛体制のもとへと組み込み、次代再生産を進んで行わせるための性的装置なのである。

- 14 告白の機制については、前掲『知への意思』を参照のこと。
- 15 上野千鶴子『（私）探しゲーム―欲望市民社会論』（筑摩書房、一九八七年一月）
- 16 注15と同じ
- 17 見られることへの欲望は、実は規律訓練型権力ではなく、その後に台頭する管理型権力に対応している。このことから、『密会』の盗聴システムは、国家権力による盗聴と、規律訓練型権力の象徴でありながら、今まさに我々を取り巻いている全く新しいテクノロジーの形を予見してもいる。結論でも述べているように、この問題については別稿を用意することにした。

付記 『密会』の引用は『安部公房全集26』（新潮社、一九九九年十二月）に拠る。